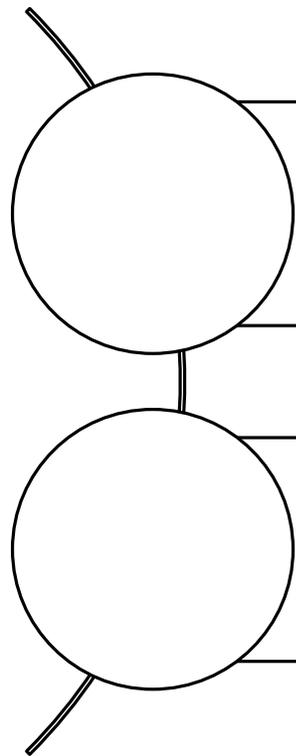




コメント

大谷栄一（佛教大学社会学部）

2つのコメント



①「新しい宗教様式」の課題

②死のタブー化の強まりと個人化

コロナ禍が問いかけるもの

大正大学地域構想研究所BSR推進センターの「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に対する調査」(高瀬師の報告)での「仮説」。

「葬送儀礼の簡略化、多様化がみられる中で、今回のコロナ禍は、葬送儀礼がさらに変化する転換点となるかもしれない」

今回のコロナ禍は、葬送儀礼の変化にとどまらず、私たちの死生観、従来の信仰のあり方や寺院の持続可能性にも関わる転換点となるのではないか？

① 「新しい宗教様式」の課題

- ・今回のコロナ禍を通じて、従来の葬儀や法務が僧侶と遺族、檀信徒との対面的で密なコミュニケーション（つながり）を前提とした相互行為（やりとり）であることが明らかになったのではないか。
- ・しかし、現在、新しい生活様式に対応した葬送儀礼や法務のあり方が求められ、実際に全国各地の現場でそうした対応が図られている。
 - 戸松師と高瀬師による仏教界・各宗派の動向の紹介。
- ・コロナ禍での新しい生活様式に対応した宗教的な儀礼や活動（葬送儀礼や法務）のあり方＝「新しい宗教様式」。
 - 森田師の「提案」、大河内師の「新しい生活様式の月参り・ご法事」。BSR推進センターの調査結果。

① 「新しい宗教様式」の課題

「新しい宗教様式」の特徴として（高瀬師の報告、BSR推進センターの調査結果を参照）

① 葬儀・法要の変化

葬儀・法要の規模の縮小（参列者の減少）と簡素化、会食の中止、寺院の月例行事や年中行事の見合わせ、月参りの減少、寺での法事の実施など。

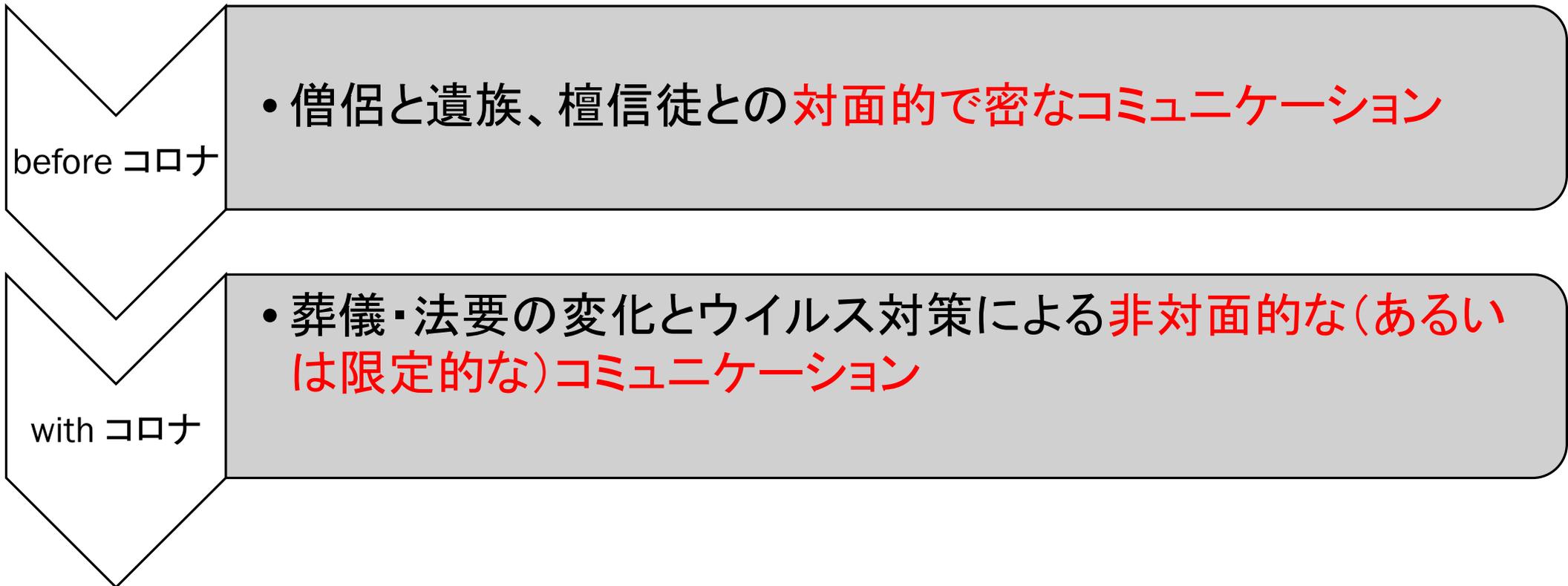
② ウイルス対策

こまめな換気や消毒液の配置、法要後の共同使用部・物品の消毒、間隔をあけての席の配置、マスクをして社会的距離を確保しての法話、参加者へのマスク持参・着用、手洗い・消毒の勧励、少人数化や焼香の分散などの防密対策など。

③ 新しい取り組みの実践（BSR推進センターの調査結果を参照）

オンライン対応、無参拝法要・代理参拝、寺報・郵送物、ウイルス対策、写経、御札・御守り配布、ウイルス退散祈願、掲示板、電話など。

① 「新しい宗教様式」の課題



① 「新しい宗教様式」の課題

コロナ禍以降、葬儀や法事でのコミュニケーションのあり方が変化したことによって、寺檀関係や信仰のあり方も変化するのではないか？

「葬儀や法事の参列者の減少や行事への影響は、寺院が檀信徒と接する場の減少にもなり、布教伝道、仏教文化の継承といった観点からの懸念もある。」(高瀬師)

① 「新しい宗教様式」の課題

では、今、何が求められているのか？

「将来、重大な症状を引き起こす感染症下に於いて慌てることなく、それに対応し儀式が執行できる良い経験にすべきである。」(森田師)

「万全の対策と安心・信頼感を持ってもらうためのこれまで以上のきめ細やかなコミュニケーションと新たなアイデアを創出することが求められている。」(大河内師)

「コロナ禍を機に新しい関係性を結び、地域や文化、一人一人の思い、違いを認める価値観を創造する。」(戸松師)

②死のタブー化の強まりと個人化

- ・新型コロナウイルス感染症の拡大による差別や偏見の発生。
 - ・「死の社会化」が減退し、悲嘆作業の個人化が加速しているので、グリーフケアの必要性が高まっている（大河内師）。
 - ・その前提として、「死のタブー化」がある。
 - ・1960年代にイギリスの社会学者ジェフリー・ゴラーと、1970年にフランスの社会史家フィリップ・アリエスが提唱（澤井敦『死と死別の社会学』青弓社、2005年）。
- 20世紀初頭（とくに第一次世界大戦後）、欧米で「死のタブー」化が進行した。

②死のタブー化の強まりと個人化

①**病院**: 家での死が病院へと退去した。

②**葬儀**: 遺体を可能な限り迅速に処理するために葬儀を簡素化。

③**死別**: 服喪儀礼が衰退し、死別の悲しみを公然と表現することが病的な不健全なこととみなされるようになった。

②死のタブー化の強まりと個人化

- ・「死のタブー化という認識」は「病院、葬儀、死別、日常会話といった場面における死をめぐる社会の編成のあり方に関わる」（澤井敦）。
- ・近代以降、日本社会は**現世中心的傾向**が強まっており、「死のタブー化」と連動している。
- ・現代日本社会のあり方は、まさに、新型コロナウイルス感染症によって逝去された人びとの存在をタブー化しており、スティグマ化（大河内師）しているのではないかと**死のタブー化が強化されている**。
- ・死のタブー化の強化、スティグマ化に対して、寺院や僧侶は何ができるか？

②死のタブー化の強まりと個人化

- ・葬送儀礼の簡略化、多様化は、「死の脱社会化」=「死の個人化」と連動している。
- ・コロナ禍による「新しい宗教様式」の定着や普及は、「死の個人化」を促進することになるか？
- ・「死の個人化」の背景にあるのは、「死の物語の断片化・多様化」（澤井敦）。
- ・死をめぐる情報自体は、現代世界の情報空間にあふれている。しかし、死をめぐる公的な解釈図式や、多くの人びとに共有されている「死の物語」とそれに伴う行動様式（葬送儀礼や悲嘆作業）は、もはや存在しない。
- ・コロナ禍のなかにある現在、法然浄土教の「死の物語」とその行動様式が、死のタブー化の強化とスティグマ化、個人化にどのような対応しうるかが問われているのではないか？

まとめ

①

- withコロナ時代において、「新しい宗教様式」の実践において、「これまで以上のきめ細やかなコミュニケーションと新たなアイデア」(大河内師)、「新しい関係性」や「新しい繋がり」(戸松師)を創出することができるかどうか？

②

- postコロナ時代において、従来の宗教様式と「新しい宗教様式」を踏まえたどのような葬儀儀礼や法務、寺檀関係、信仰のあり方、寺院の持続可能性を展望できるのか？

③

- 現代日本社会における死のタブー化、スティグマ化、個人化に対して、寺院や僧侶は何ができるか？